

史料  
紹介  
岡山藩官位関係史料(二)

前稿<sup>(1)</sup>に引き続き、本館架蔵「池田家文庫藩政史料マイ  
クロ版集成」<sup>(2)</sup>のうち、岡山藩主(二族を含む)の官位叙  
任に関する史料を翻刻・紹介したい。凡例は前稿と同じ  
である。

今回翻刻・紹介する史料は、次の通りである(史料の  
番号は、前稿からの続き番号)。

- 七、慶長七年五月二三日「池田三左衛門殿少将成之御祝  
之覚」<sup>(3)</sup>
- 八、慶長八年三月二五日「竹村勝長宛口宣案」<sup>(4)</sup>
- 九、年未詳「口宣案・宣旨等覚書」<sup>(5)</sup>

堀 新

- 十、「御湯殿上日記」慶長十四年五月(抄)<sup>(6)</sup>
- 十一、「芳烈公御手留」承応二年(抄)<sup>(7)</sup>

前稿では、元禄九年(二六九五)の池田綱政の少将昇  
進に関する史料を一部紹介した。今回は、引き続きそ  
の関連史料を紹介すべきではあるが、それに溯る史料を  
「池田家文庫藩政史料マイクロ版集成」に見つけ出した  
ので、年代順を優先して、まずは古い史料から紹介する  
こととする。そのさい「池田家文庫藩政史料マイクロ版  
集成」以外のものも含めて紹介する。元禄九年の池田綱  
政の少将昇進に関する史料は、次回に紹介したい。

史料七は、慶長七年（一六〇二）藩祖池田輝政の少将昇進の官物（官位昇進の謝礼）に関する史料である。これは江戸幕府が官物の額を定める以前のものであり、貴重なデータといえる。

宮脇又兵衛は、武家伝奏である広橋兼勝・勸修寺光豊のいずれかの家司と考えられる。勸修寺家関係の史料中に宮脇姓の者を見出すことは少ないので、広橋家の家司であろうか。

この史料七で注目されるのは、年次が慶長七年となっていることである。一般に、輝政の少将昇進は慶長八年の徳川家康の征夷大將軍任官時とされている。<sup>(9)</sup> 輝政が発給文書中で「少将」を名乗るのは慶長一二年以降である。<sup>(10)</sup> 現段階では、輝政の少将任官日時を確定することは難しい。

史料八は、輝政家臣である竹村勝長の従五位下・伊豆守任官の口宣案の写である。原本は現在不明であるが、家譜には「備前岡山同姓方所持仕」とあり、<sup>(11)</sup> 『池田家履歴略記』にも「伊豆守か末孫半兵衛か家に、今も其時の

口宣案を所蔵す」とある。<sup>(12)</sup> 明治初頭までの原本の実在は確認できるのである。なお、この時八田太郎兵衛も丹後守（のち豊後守）に「任官」したという。<sup>(13)</sup> これは前述した徳川家康の征夷大將軍任官に輝政が扈從して参内したことに関連して、諸大夫が必要となったことによるものである。竹村家譜でも、任官の理由を「半兵衛儀、御供被仰付候ニ付」としている。<sup>(14)</sup>

豊臣期から江戸幕府成立当初にかけて、大名の官位が異常に高くなり、陪臣叙爵（任官）の例も珍しくなかった。竹村・八田の任官も、その一例であろう。その後陪臣叙爵は、御三家などの家門大名の他には、加賀藩前田家家老に許されるのみとなった。岡山池田家では、竹村・八田の先例を引き合いにして、幕末の文久三年（一八六三）に藩主茂政の宰相任官と家老二人の任官を運動するが、はたされなかった。<sup>(15)</sup>

史料九は、池田利隆・光政の任官に関する関係史料の目録である。前稿でも述べたように、「池田家文庫」には当主の叙任文書原本はない。従って、史料九であげら

れているものの原本もないが、これらの叙任文書が確かに発給されたことの証左となる史料として貴重である。

利隆は輝政の長男であるが、その従四位下・侍従、右衛門督任官を『寛政重修諸家譜』は慶長十年三月二六日とし、<sup>(16)</sup>「池田氏系譜」は同年六月一六日とする。<sup>(17)</sup>史料九によれば、これら系譜類の日時はいずれも誤りとなる。

叙任文書上では、利隆はまず三月二六日に従五位下・侍従に任官し、ついで四月二一日に従四位下に昇進したのである。

叙任文書は日時を溯って作成されたり、後に書き改められたりすることがあるなど、全幅の信頼がおけるわけではない。<sup>(18)</sup>従って、この史料九に記されている日付も同様であるが、他の例に鑑みて首肯できる点がある。

例えば、利隆がまず従五位下・侍従に任官している点である。豊臣期の国持大名の官位は、従五位下・侍従を基本としていた。<sup>(19)</sup>利隆はまずその官位に叙任したことになるのである。そして、その直後に従四位下に昇進した点は、江戸幕府下の国持大名の初官が従四位下・

侍従であるものの、それ以前に従五位下に任官していたことにする作為に共通する。これは、国持大名が従五位下を越階して従四位下にいきなり叙任された事実を隠蔽し、体裁を整えるために日時を遡って従五位下に叙任されたとする作為である。利隆の場合も、その作為の可能性が強い。

しかし、江戸幕府下の一般例と異なる点や、不自然な点もある。例えば、前述した隠蔽工作においては、正徳年間までは従五位下任官を従四位下任官の一年前とし、侍従任官は従四位下と同時にするのが一般的であった。<sup>(20)</sup>約一カ月前というのは、期間が短すぎる。また、侍従任官の日時が、宣旨と口宣案とで食い違っているのは不自然である。

ところで系譜類にある右衛門督「任官」については、<sup>(21)</sup>受給文書からも確認できる。しかし、史料九には右衛門督「任官」に関する叙任文書の存在は記されていない。<sup>(22)</sup>右衛門督は官位というよりも通称名であるが、江戸幕府下では叙任文書が発給される。『池田家履歴略記』は右

衛門督「任官」を四月六日とし、『寛政重修諸家譜』「池田氏系譜」とも異なっている。いずれにせよ、利隆の右衛門督「任官」にさいして、叙任文書は発給されなかつたのであろうか。

これらの点を解明する材料は乏しく、現段階では首肯できる点と不自然な点を、それぞれ指摘するにとどめざるをえない。

なお、松平賜姓・武蔵守改名の日時については、史料九は系譜類と同じ慶長十二年六月二日とする。

次に利隆の子光政の叙任であるが、元和九年（一六二二）に從四位下・侍従に任官し、寛永三年（一六二六）に少将に昇進したことは、系譜類と同じである。

しかし、從四位下・侍従任官の日時を史料九は八月とし、『池田家履歴略記』は四月、「池田氏系譜」は七月とする。『寛政重修諸家譜』は具体的な日時をあげていない。史料九の八月六日は、家光の將軍宣下による参内の日時である。これも、そのいずれが正しいのかは不明である。

なお、少将任官の日時（寛永三年八月九日）は、諸書と一致している。

続いて史料十は、輝政二男（利隆の異母弟）忠継の慶長一四年五月の從四位下・侍従任官に関する史料である。

『寛永諸家系図伝』<sup>(24)</sup>・『徳川実紀』<sup>(25)</sup>・『寛政重修諸家譜』などは、忠継の任官を前年の慶長一三年四月一八日とする。しかしこれは秀忠に拝謁した日時であつて、この時は元服・叙任のいずれもなされていない。それは、勸修寺光豊が輝政に（慶長一四年）五月一八日付書状案で

「御名乗相極次第二、口宣竝宣旨可申調候」と述べていることからわかる（名乗りが決まっていないことは、元服前を意味する）。五月二一日付書状案には「口宣二通竝宣旨相調」とあるから、この頃元服したと思われる。

忠継の從四位下・侍従任官も、元服と同時の可能性が強い。しかし、前年に江戸の秀忠から叙任を仰せ渡され、この時は叙任文書を整えただけの可能性も残る。いずれにせよ、「口宣二通竝宣旨」とあることから、位記を除く叙任文書のすべてが整えられたようである。この時の

官物の例も、史料七と同じく貴重なデータである。なお、この時忠継が一歳であるためか、父輝政からも官物が提出されている。

最後の史料十一は、光政の子綱政が承応二年（二六五三）一二月に元服し、従四位下・侍従に任官したさいの、父光政の日記を抄出したものである。

この史料十一によれば、一二月二日に老中松平信綱が岡山藩江戸留守居役（能勢少右衛門）を呼び、翌々二三日に綱政の元服を行なうことが告げられた。このような内示は、元和九年の上杉定勝の例など数多くある。この内示を受けて、元服までのあいだに、江戸城中での作法を訓練する例もみられる。

綱政はこの時一六歳であり、元服年齢としては平均的であろう。綱政の場合、天樹院（千姫）からの推薦があったようである。天樹院は秀忠の娘であり、豊臣秀頼に嫁したが、大坂落城後本多忠刻に再嫁した。この二人の間に生まれた勝子は、いったん家光の養女となつたうえで光政に嫁し、綱政を生んだのである。従って、天樹

院は綱政の祖母にあたる。この血縁関係から、綱政の元服を勧めるということになつたのであろう。

元服の当日（二三日）、父光政も登城した。そこで大老酒井忠勝から「成人したうえは官位を仰せ付け、侍従に叙任する」と伝えられ、光政は「こちらから（叙任を）願ひ出ることを憚っていましたが、（幕府側から叙任を申し出てくれて）大変ありがたいことです」と答えている。元服すれば官位叙任されることが当然という認識が幕府と大名双方にあつたこと、建前上は大名側から官位叙任を願ひ出るものではないこと、などがここから読み取れる。

元服の儀礼は、老中酒井忠清から御一字「綱」（と書かれた折紙カ）が下され、盃・刀などが下された。これらの拝領物は、他の例とほぼ同じである。

なお、大名嫡子の元服については、翌承応三年の伊達綱宗の事例がやや詳細にわかる。<sup>(30)</sup>元服の当日の朝、綱宗は下屋敷で髪を剃り、おそらく上屋敷から登城した。將軍家綱の御前で元服・一字拝領・侍従叙任し、上屋敷で

御祝儀の御拍子三番が行なわれた。実際に髪を剃るのは下屋敷、元服・叙任儀礼は江戸城、御祝儀は上屋敷というように、明確に分けられていたようである。大名にとって上屋敷は公式の場(息苦しい場)、下屋敷は気楽な場という指摘は正鵠を得ている<sup>(31)</sup>。

ところで、御祝儀の一環として、綱政は「惣家中不残」に対して「小袖・良子」を遣わしている。このように家中に対して下賜品があるのは、同じ承応二年の上杉綱勝の場合にも見られる<sup>(32)</sup>。逆に家中からも、御祝儀が献上されるのが通例で、前述した元和九年の上杉定勝の場合にも見られる<sup>(33)</sup>。このような祝儀のやり取りは、元禄九年の綱政の少将昇進の場合、江戸と国許で一年以上に及んでいる<sup>(34)</sup>。御祝儀のやり取りそのものは、戦国大名段階でも行なわれていたが、近世大名の場合はその規模が桁違いに大きい。一年以上に及ぶ慶祝行事は、藩主・世子と家中の一体化を演出・醸成する恰好の機会であった<sup>(35)</sup>。

以下、詳しくは翻刻を御覧いただきたい。

註

(1) 拙稿「史料紹介 岡山藩官位関係史料(二)」(『早稲田大学図書館紀要』四二、一九九五年)

(2) 『池田家文庫藩政史料マイクロ版集成』は、岡山大学附属図書館所蔵「池田家文庫」をマイクロ化したものである。以下、史料の年代・表題と「岡山大学所蔵池田家文庫総目録」(一九七〇年)の整理番号・「池田家文庫藩政史料マイクロ版集成」のルールNoを、年代「表題」(整理番号\*ルールNo)と記す。

(3) 慶長七年五月二三日「池田三左衛門殿少将成之御祝之覚」(『国民精神文化文献一三 立入宗継文書・川端道喜文書』、国民精神文化研究所、一九三七年)

(4) 慶長八年三月二五日「竹村勝長宛口宣案」(鳥取県立博物館所蔵「鳥取藩政資料」のうち「竹村勝任家家譜」)

(5) 年未詳「口宣案・宣旨等覚書」(『C四一九四\*YCD一〇〇四』)

(6) 「御湯殿上日記」慶長十四年五月(抄)(『統群書類従』補遺三)

(7) 「芳烈公御手留」承応二年(抄)(『A一—三\*TA A—〇〇一』)

(8) 元禄九年「綱政様御任官之節御勤覚書」(『C四一—四\*YCD一〇〇一』)、元禄九年「御任官始末帳」(『C四一—〇七\*YCD一〇〇二』)、元禄九年「曹源寺 様少将御拝任之節御留」(『C四一—〇八\*YCD一〇〇一』)

- (9) 「池田氏系譜」(C—1—18\*TC A—001)、「寛永諸家系図伝」、「寛政重修諸家譜」など
- (10) 黒田基樹「池田輝政の発給文書について」(深谷克己編「岡山藩の支配方法と社会構造」、科研報告書、一九九六年)
- (11) 註(4)
- (12) 「池田家履歴略記」(日本文教出版、一九六三年) 上巻・六二頁
- (13) 同右
- (14) 註(4)
- (15) 「(文久三年)三月三日因州公被呈之御書」(「岡山地家文書」一、東京大学出版会)
- (16) 「寛政重修諸家譜」
- (17) 「池田氏系譜」(一)(註(9)参照)
- (18) 拙稿「近世武家官位の成立と展開——大名の官位を中心に——」(山本博文編「新しい近世史」一 国家と秩序、新人物往来社、一九九六年)
- (19) 黒田基樹「慶長期大名の氏姓と官位」(「日本史研究」四一四、一九九七年)
- (20) 註(18)
- (21) 註(10) 黒田論文
- (22) 拙稿「近世武家官位試論」(「歴史学研究」七〇三、一九九七年)
- (23) 池田忠継の従四位下・侍従任官に関しては、岡山藩研究会「中世—近世移行期分科会・池田部会」での史料輪

史料  
紹介 岡山藩官位関係史料(一)

- 読・討論の成果を前提としているが、記述内容の責任はすべて筆者(堀)にある。
- (24) 齋木一馬・林亮勝・橋本政宣校訂「寛永諸家系図伝」(統群書類従完成会)
- (25) 「新訂増補国史大系 徳川実紀」(吉川弘文館)
- (26) 「勅修寺光豊公文案」所収(慶長一四年)五月一八日付播磨少将(池田輝政)宛勅修寺光豊書状案(「大日本史料」十二編ノ六、三五五頁)
- (27) 「勅修寺光豊公文案」所収(慶長一四年)五月二一日付播磨少将(池田輝政)宛勅修寺光豊書状案(「大日本史料」十二編ノ六、三五五頁)
- (28) 藤井駿・水野恭一郎・谷口澄夫共編「池田光政日記」(山陽図書出版、一九六七年)と若干の字句異同があるが、ほぼ同文である。
- (29) 「上杉家御年譜」四(原書房 二七—三三頁)
- (30) 「仙台藩史料大成 伊達治家記録」五(宝文堂、一九七四年)四五四頁
- (31) 氏家幹人「江戸藩邸物語」(中公新書、一九九一年)
- (32) 「上杉家御年譜」五(原書房 二四三頁)
- (33) 註(29)
- (34) 註(8)
- (35) 拙稿「武家官位の在地効果説をめぐって——大名の官位と「家政」「国政」——」(岡山藩研究会編「題目未定」、岩田書院より一九九八年に刊行、に収録予定)

【翻刻】

七、慶長七年五月二三日 池田三左衛門殿少将成之御祝

之覺

池田三左衛門殿少将成之御祝之覺

禁裏様

御馬・太刀・銀子三拾枚

女院様

金子壹枚・生絹五ツ

親王様

御馬・太刀・銀子五枚

女御様

三束・巻物五たん生

長橋殿

一束・巻物壹ツ同

大御ちの人

巻物壹ツ同

そち殿

一束・巻物壹ツ同

儀同殿

御馬・太刀・銀子三枚

廣橋大納言殿

御馬・太刀・銀子五枚

勸修寺宰相殿

御馬・太刀・銀子壹枚

上卿

御馬・太刀・三百疋

職事

御馬・太刀・三百疋

内侍所

御太刀・三百疋・銀子壹枚

井家撰津守

五百疋

立入河内守

三百疋

速見右近大夫

三百疋

山形三郎

百疋

慶長七年

五月廿三日

宮脇又兵衛

(花押)

八、慶長八年三月廿五日 竹村勝長宛口宣案

上卿中山中納言

宣旨

慶長八年三月廿五日

藤原勝長

宜叙従五位下

藏人右中辨藤原総光奉

上卿中山中納言(慶親)

慶長八年三月廿五日 宣旨

從五位下藤原勝長(竹村)

宣任伊豆守

藏人右中辨藤原總光奉(広橋)

九、年未詳 口宣案・宣旨等覚書

覚

一、口宣案 三通、豊臣照直

後改利隆

内

一通 慶長十年三月廿六日

宜叙從五位下

一通 同年同月同日

宣任侍從

一通 同年四月廿一日

史料 岡山藩官位関係史料(二) 紹介

正五位下豊臣照直(從力)

宣叙從四位下

一、宣旨

一通

慶長十年四月八日

從五位下豊臣朝臣照直

宣令任侍從

秀忠公御書判

一、慶長十二年六月二日 一通

加冠 宣任松平武藏守

一、口宣案 三通、源光政

内

一通 元和九年八月六日

宜叙侍從

一通 同年同月同日

宜叙從四位下

一通 寛永三年八月十九日

宣任左近衛権少将

一、宣旨 一通

元和九年八月六日

従四位下源朝臣光政

宜令任侍従

一、女房奉書 一通

ゑもんのすけとのへ、とあり

東福門院様ノ御女中

十、御湯殿上日記 慶長十四年五月(抄)

十三日 是る、。いけたし、うくけなりの御禮とて。し

ろかね卅まいまいる。せいりやうてんにて御たいめん

あり。御さか月くたさるる。御かたの御所も御たいめ

ん。しろかね十まいまいる。女みんの御所。女御の御

かたへもまいる。(以下略)

十六日 是る、。いけたし、う四ほんの御禮とて。しろ

かね五まいしん上申。(以下略)

十八日 是る、。はりまの少将すきはら廿そくしん上。

十一、芳烈公御手留 承応二年(抄)

(表紙)

三 此一冊ハ、御手留横帳ノ

部分、一ト八ト二冊ニ粗合候事

己国ニ而

承応二年正月元日

宣同三月五日迄国ニ而

同一年十二月晦日迄ノ帳也

明暦二年八月朔日

同年十二月迄

(承応二年極月)

同廿一日

(松平信綱)

(能勢)

(池田綱政)

一、松伊豆殿少右衛門御呼候而、三左衛門元服廿三日

と被 仰出候はん間、左様ニ御心得可有候、先而御礼

明日父子共ニ登 城仕候様ニと被仰聞候事、

廿二日

(酒井忠勝)

一、御城へ上り候所、讚岐殿被仰渡、三左衛門殿元服之

事、天しゆ院様千姫被仰上候旨、達上聞候所、成人も被

仕候間、明日被仰付旨、昨晚被仰出候旨、忝仕合ニ奉

存候由申上、退出候、

廿三日

一、登城仕候所、讚岐殿被仰渡候ハ、今日元服被仰付候、

成人も被仕候条、官位被 仰付、侍従ニ被成候由、我

等申候ハ、唯今之被仰渡、たとへ願申とてもは、か

りニ存候故、申上候事ハ存も不寄候処、重々難有義、

可申上様無御座候由申上候、

其後、伊与守御前へ罷出、元服忝由其礼申上候、其時

(酒井忠勝)

御字うた殿を以被下候、其後進物出雲取次、御太刀指

上候、其後、又御前へ罷出、御引渡をわり、御盃被下、

御肴被下、くわへ之時、行光之御刀拝領、うた殿御渡、

御次にてさし罷出、御禮申上候、又くわへ申、御次ニ

かわらけ持罷出候時刀ぬき、又元之座へ罷出、引渡と

れ申候て、重々忝義御礼申上罷在候、其後我等進物指

上罷出、御礼申上候、重々難有義御礼申上候事、

廿六日

一、官位祝義、何も伊与守と礼申候、惣家中不残下々迄

(綱政)

伊豫守の小袖・良子遣候事、

(ほり しん 早稲田大学エクステンションセンター講師・共

立女子大学専任講師)